

何歳になっても チャレンジできると 生徒たちに伝えたい

神奈川県立高校 数学教諭

田口 郁子さん TAGUCHI IKUKO

1980年生まれ。横浜共立学園中学校高等学校卒業。大学を卒業後、株式会社日能研に入社。8年間務めた後に学校法人に転職。31歳のときに東京理科大学理学部第二部数学科に入学。教職課程を修め、2016年4月より神奈川県教育職員として県立高等学校に勤務中。



子どものころの夢は教員になること

現在、神奈川県内の公立高等学校で数学教員として教鞭を執る田口郁子さん。子どものころから憧れていたこの仕事に就いたのは、35歳のときだった。

人前に出るのが苦手。授業中には先生にあてられるのが嫌で、いつもびくびくしていたという。そんな田口さんが教員になって教壇に立つとは周囲の人々も、自分自身も思いもしなかった。しかし、さまざまな出会いやきっかけが、田口さんを教員の道へと導いていった。



幼少期。2歳違いの姉と。左側が田口さん

どんな出会いやきっかけがあったのか。

「数学を好きになるきっかけはいくつかありました」と田口さんは回想する。最初は小学校に入ったとき。学校でもらったお道具箱のセットの中に、タイルがあった。これを並べて遊んでいたら、繰り上がり、繰り下がり、計算が視覚的に理解でき「すごいな！ 算数っておもしろい！」と感動したという。それが算数に興味を持つ最初のきっかけだった。

2度目のきっかけは、中学3年生のころ。「円の定義って何だと思う？」と授業で先生に聞かれたときだ。「え？ 丸いという以外に何かあるの？」と、思ったが、答えは「ある点から距離が等しい点の集まり」と聞いて、「なるほど、だからコンパスはあの形をしているんだ！」とすごく腑に落ちた。

「数学って机上で問題を解くだけでなく、身近なことに役に立っているんだ。数学ってすごいな」と思ったことが強烈に記憶に残っている。

進路に悩み、未知のチャレンジの方を選ぶ

「先生になりたいと思ったのは、学校が好きだったことと、良い先生に恵まれてきたからだと思う」と田口さん。しかし、進路決定に悩んだ末、一度は教員の



小学校の卒業式の日に友人たちと。左が田口さん

道を断念している。

「数学はずっと好きでしたが、突き詰めると哲学的になっていって、10代の自分には重すぎると感じました。一方、父が建築関係の仕事をしていたことから、建築に興味がありました。ものづくりが好きで、美大に行って伝統工芸の職人になりたいと思ったこともあるくらいなので、建築の道に進んで何かを作るのもいいなと思っていました。さらに、個人的な問題意識として環境問題にも興味があって……」

迷った末、「数学への興味はたぶん一生続くからいつでもそこに戻れる。若いうちに新しいチャレンジをしたい」と思い、大学に入学。環境系の学部で公園や緑地など、幅広い分野について学ぶことになった。

あるとき大学で、キャンプ場の計画を立てるという課題が出た。しかし田口さんはキャンプの経験がなくキャンプ場のイメージがわからない。そんなときに、田口さんが小学生のころ中学受験のために通っていた進学塾の日能研が、サマーキャンプのスタッフをOBから募るという情報を得て、渡りに舟と思い参加した。

それが、後に田口さんの人生を変えることになった。

子どもの成長に感動し、教育に興味を持つ

キャンプに参加する子どもたちのほとんどは小学校の低学年で、親元を離れてキャンプ泊をするのは初めて。いつも親に言われるまま過ごしてきた子たちは、初日、「何をするかしないか、自分で決めていい」と言われて戸惑っていた。夜になると寂しがつて泣く子どもも少なくなかった。

ところが、5泊6日のサマーキャンプを終えるころには、初日に親に手を引かれてきた子がすっかり自立して帰っていく。その変化に驚かされた。

「子どもって、【周囲の環境】で大きく変わるということを目の当たりにしました」



高校時代の文化祭。美術部だった田口さんは、アーチの制作に携わった。



高校3年生のときに校内の球技大会で優勝し記念撮影。

大学院には行かず就職の道を選ぶ

大学院への進学を考えたこともあったが田口さんは就職の道を選択した。「もし大学院に行くなら一度就職して、自分のお金で行くという約束を家族とした」からだ。しかし、就職先を聞いた指導教授は啞然とした。大学での研究分野とは何の関連もない職種だったからだ。

その就職先とは、かつて自分も通った日能研。

「自分でもまさかここに行くとは思っていませんでしたが、あのサマーキャンプの経験が強烈で、教育分野で子どもたちと関わる仕事がしたいと思ったのです」

社会人として働きながら教職課程を学ぶ

就職後の田口さんは、本人曰く「猛烈社員」。お盆も年末年始もほとんど休むことなく、仕事に没頭した。「毎日自分の成長が実感できるのが楽しく、すごく充実していました。大学では教職課程を履修していませんでしたが、『人に教える』ことを基礎から学ぶことができました。子どもにとって先生の影響はとても大きい。こちらの言葉ひとつでその教科が好きになったり嫌いになったりもしますし、時にはその子の人生を変えることもある。その厳しさを先輩からみっちり叩き込まれました」

しかし、8年目に入っところ、このまま仕事だけの人生でいいのか、1回しかない人生、今しかできないことが他にあるのではと疑問を持つように。

そこで、転職を決意。教育に関わっていたいという気持ちはあったが教員免許は持っていないので、学校事務の仕事を探し、ある私立中高一貫校に職を得ることができた。塾での経験を活かし、学校の広報活動を担うことになった。田口さんが30歳のときのことだ。

しかし、日能研で日々休みなく働いてきた田口さんには学校の仕事は物足りなく感じた。スピード感も、「売上」や「利益」に対する切実感も塾のころとは全然違う。「なんだか時間を持て余してしまったんです」

学校の勤務は、夕方は4時半まで。終業後の長い時間、何をしたらいいのかと途方に暮れた。

そこで浮上したのが、大学に入り直して数学を学ぶという考えだった。

高校で進路に迷ったとき、「もし数学の道に進むなら東京理科大学に行きたいと思っていた」という田口さん。幸い理科大には二部（夜間）がある。終業後急いで駆け付けければ、1時間目には間に合わないけれど2時間目からなら出席できる。上司に相談すると、「終業後の時間は自分の時間だからかまわない。せっかく学校で働いているのだから、教職課程で教育の基本を学ぶのも良いのでは」と言っていた。

社会人卒で受験をし、小論文と面接、口頭試問を経て合格。仕事と大学の両立生活が始まった。

同級生たちは自分より一回りも若い人たちと一緒にやっていけるのかと心配する先生もいたが、進学塾で子どもたちと接してきた経験があるから不安はなかった。同級生たちは親切に接してくれ、勉強会に誘ってくれたり、卒業旅行も一緒に行った。「一人ではくじけたかもしれませんが、この友人たちに救われました」

苦労したのは勉強面だ。ブランクが長く、忘れていることが多かったし、問題を解く瞬発力の衰えも実感した。「毎日予習復習をしないと、若い子たちについていけない」と必死だった。

思いもかけず、教員への道が拓ける

教員免許の取得には、3週間の教育実習が必須だ。



環境問題に取り組んでいた大学時代。他大学の学生たちと環境先進国のデンマークとドイツを視察。



日能研に勤務していた「猛烈社員」の頃。教え子たちに囲まれ、日々やりがいを感じていた。

さすがに3週間も仕事を休むわけにはいかないと考えたが、幸い上司が教育実習に行くことを許可してくれた。それだけでなく、実習で不在になる期間の業務負担を考慮して部署の異動までさせてくれたのだ。田口さんは、周囲になるべく迷惑をかけないように、仕事を前倒して済ませるなど工夫したが、「それでも多大な迷惑をかけたと思います」と振り返る。

懸案事項だった教育実習もクリアし、無事、教員免許状を取得。だが、教員になるつもりはなく、元の職場でこれまでと同じ毎日が始まるはずだった。たとえ教員免許を取得しても、事務職として採用されたので教員にはなれないことは承知していたからだ。

しかし、ゼミの小谷佳子先生に「せっかく苦労してここまで通ったのだから、このまま教員採用試験を受験しては？」と助言され、気持ちが揺らいだ。「ダメもとで受けてよう」とトライすると、一次試験をパスしてしまった。二次試験は模擬授業だった。日能研時代に数多くの授業をこなしてきたため緊張することなく臨み、これにも合格。しかし、合格通知を受け取ったときは、「嬉しい」というより「どうしよう」という気持ちだった。

喜びもつかの間、苦渋の選択を迫られる

田口さんは、「教員になりたい」という思いと、「これまで親切にしてくれた職場に申し訳ない」という2つの想いの間で悩みに悩んだ。

理科大で学ぶ中で、「やっぱり自分は数学が好きなんだ」と再認識した。再び事務職に戻って給与計算や年末調整をするのか。1回しかない人生、それでいいのか。

でも、これまでさんざん迷惑をかけて大学に通わせ

てもらったのに、「教員採用試験に合格したから辞めます」なんてとても言えない。せっかく合格したが採用を辞退するべきか。胃がきりきり痛むほど迷った。

しかし、辞退するとしても期限がある。いつまでも迷ってはいられなかった。

ついに田口さんは、教員になると決意し、思い切って同僚と所属長に打ち明けた。上司は「さんざん悩んだ末の結論だろうから」と、認めてくれた。

「子どものころから人に迷惑をかけないようにと育った私が、生まれて初めて、自分でも自覚しながら人に迷惑をかけた。でも、もう言っちゃったしやるしかないな、そういう気持ちでしたね」

退職までの数カ月間は生きた心地がしなかった。しかし、ここで手抜きをしたら人間として最悪。卒論も書かなければならないし、目が回るほど忙しかったが、なんとか残務処理を終え、5年間お世話になった学校をあとにした。

35歳で念願の教員になる

2016年4月、ようやく憧れていた数学教員としての人生がスタートした。田口さんは35歳になっていた。

一大決心して赴いた学校は、全く未知の世界だった。勉強に苦手意識があったり、勉強が好きではない生徒も多い中、「数学を好きにはなれなくてもせめて嫌いにはならないでほしい」と思いながら授業を工夫している。授業だけでなく、生徒指導や福祉的な視点の求められる仕事にも多くの時間を費やさなければならない日々は、恵まれた生徒の多い私学しか知らなかった田口さんにとって、驚きの連続だった。「自分の常識ってとても狭い世界の常識だったんだと思い知りました」

新人なのに、周囲の先生がたよりも年上という状況にも戸惑ったが、心優しい同僚たちには救われた。

初任校で知り合った同僚と結婚。その後転勤し、現在勤める学校は三校目。



教育実習先にて。「この子どもたちが良い人生の選択ができるよう自分の経験を伝えていきたい」

「学校ごとに生徒のタイプも校風も異なり、毎回一から学び直しの日々。生徒一人ひとりの抱える事情がさまざまで、責任の重い仕事だなと実感しています。生徒の人生の選択にすぐく影響がある仕事でもあり、やりがいを感じています」

行動すれば出会いが生まれ運に恵まれる

これまでの人生を振り返り、「運が良かった」と田口さん。「良いタイミングで良い人たちに巡り合ってきた。大学時代に日能研のキャンプに参加し子どもの可能性に触れたこと、31歳で理科大に行こうと思ったときに、それを許してくれる職場にいたこと、理科大で小谷先生に背中を押されて教員採用試験を受けたこと。理科大で一緒に学ぶ仲間に出会えたことも大きかった」

しかし、そういう出会いも、自分が行動しなければ起こらなかった。自分が行動を起こすことで出会いが生まれ、運に恵まれる。そして、何歳になってもチャレンジできる。それを生徒たちにも伝えたい。

「困難にぶつかったときに、『そういえば先生が言ってたな。せっかくの機会だからチャレンジしてみよう』と思い出してもらえたら嬉しいですね」

取材を終えて

「授業ではよく雑談をする」という田口さん。「自分の生きてきた道を語ることで、何かを学び取り、より良い進路を考えてくれれば」と。そういえば、恩師の思い出って雑談のほうが多かったなと思ひ出す。田口さんの想いが教え子たちに届きますように。

(フリーライター／石井栄子)